

## 世界で活躍できる学生たちの教育をめざして

### ～留学生センター相談室（204号室）活動報告～

田 中 京 子 ・ 柴 垣 史

#### 1. はじめに

2004年度に法人化した名古屋大学は、地域社会や国際社会で核となりつつ、より大きな社会貢献をすることをめざしている。研究や教育、組織を国際化していくことが、そのための重要な課題となっている。留学生センターが留学生教育や教育交流を通してこれまで蓄積してきた知識や経験を活かすべき場面が多くなっている。大学の躍進のためでもあり、それはすなわち学生たちをより国際的な場で活躍できるようにするためでもある。

留学生センター相談室は、引き続き田中と柴垣が担当し、全学の留学生相談室と連携しながら、オリエンテーション、ワークショップや日々の相談活動を通じた学生の教育、生活支援を着実に行うとともに、学内や地域の国際化に生かすために新たな発想も心がけながら、学内外委員会等での活動を継続して行った。

#### 2. オリエンテーション：情報提供、信頼関係構築、交流促進

留学生の渡日前から修了後に至るまでの参加型、交流型、日本語・英語併用型オリエンテーションを継続、充実させた。

##### (1) 渡日前オリエンテーション（留学生センター所属学生対象）

新入予定の学生が、渡日前から留学生センターのスタッフや学生たちと交流して信頼関係を築いていけるよう、事務室との協力で渡日前情報を作成、郵送した。同内容を電子メールでも発信し、その後新入予定者、学生、スタッフ、等が互いに連絡を取り合った。情報の中には、在学留学生でその期の情報提供者として登録した学生のリスト及び彼らからの渡日にあたってのアドバイスを含めた。多くの新入学生にとって、渡日

時には既に名古屋大学のスタッフや学生のネットワークの中にいる、という状態になっている。

これまで更新し蓄積してきた情報は、名古屋大学新入留学生のための『入学前ガイドブック』作成へとつながり、全学的に多いに貢献することができた。

##### (2) 到着後オリエンテーション（留学生センター所属学生対象）

新入生には、彼らの名古屋到着時に、留学生センターからの歓迎メッセージとその後の予定を記したパンフレットを、宿舎で待つACE（Action group for Cross-cultural Exchange）から手渡した。到着翌日（平日）には、地域ボランティアの協力で区役所で外国人登録と国民健康保険加入を行い、この手続きの際使用した新入学生の氏名のカタカナ表記を、ボランティアメンバーがファックスで留学生センターに送付するという方法を続けた。これにより、その後大学で使用するカタカナ表記が、健康保険等に使用する表記と統一できるようになった。

後日留学生センターでオリエンテーションを行った。留学生センターオリエンテーションは、事務室による書類記入、日本語教育メディア・システム開発部門によるコンピュータ室使用説明、相談室による生活関係の説明、日本語コースについての説明を、部門間で協力して行った。

##### (3) ワorkshop型オリエンテーション（全学学生対象）

今年度は、これまでのワークショップの日本文化・社会の紹介に加え、後期には、外国語に触れるチャンスを見込める学生を対象にした言語文化コミュニケーション講座“Language Shower”を取り入れるなど、ワークショップへの参加対象者、目的を拡げて行なった。

今年度の特徴は以下である。

- ・日本文化、社会を紹介するセッションでは、これまで協力してきた講師の方々が引き続き各セッションで講義と実践指導をおこなった。
- ・地震についてのワークショップは、今年度も災害対策室との連携により行なった。学生へ情報提供だけでなく、災害時に役立つサービスの更新や新しいシステムの導入などを知る機会ともなった。
- ・前年度から引き続き、国際開発研究科前期課程大学院生の澤井萌さんがボランティア通訳を務めた。自身の通訳能力の向上だけでなく、日本文化を紹介することにも興味もって取り組んでくれた。
- ・新たな企画である“Language Shower Program”は、英語を聞き、話し、英語を使って積極的にコミュニケーションすることを経験する機会として開催し、在籍学生、研究者、職員を対象とした。学内外5人の英語話者にファシリテーターとして協力願い、5つのトピックを用意した。参加者の興味によりトピック毎のグループに分かれ、約1時間半で2つのトピックについてディスカッションを楽しんだ。英語能力レベルを問わずに参加者を募集したが、結果的には、海外留学が決定している学生、これから留学を目指し英語学習をしている学生、共通言語としての英語を使用する留学生など、中級以上の英語レベルを持つ参加者が集まった。1グループ3～6名の少人数であったため、参加者一人一人の発言の機会が多く、内容の濃いものになって参加者の満足度は高かった。その結果、自主研修グループが生まれ、ボランティア講師と共にプログラム後も研修会を継続している。言語・文化・コミュニケーションに関するプログラムへの学生の要望は多く、今後は英語以外の言語もとりあげながら、ニーズに合わせて企画実施していきたい。

- ① 昨年度から、講師の交通費や材料費、通訳への謝礼の一部の支出について、3万円を限度に、留学生後援会からの留学生センター支援金を使用できることになった。昨年度購入した書道の道具が役に立ち、また通訳のためにわずかではあるが謝礼を出すことができた。別途“Language Shower Program”のために留学生センター予算に3万円を計上することができ、講師に謝金を支払うことができた。

1. 4月25日：日本の習慣と作法（進行：留学生センター相談室）
2. 5月30日：地震が来る？（指導：名大災害対策室）
3. 6月13日：華道（指導：大澤万香、八代流家元）
4. 6月27日：日本のビジネスマナー（指導：山崎直美、Office Bruge）
5. 7月11日：引越し（進行：留学生センター・留学生相談室）
6. 11月7日：地震が来る？（指導：名大災害対策室）
7. 12月19日：引越し（進行：留学生センター相談室）
8. 1月9日：書道（指導：藤井尚美、藤井書道教室）
9. 1月30日：Language Shower: Let's speak, listen and discuss in English!

#### (4) ホームページ・電子メールによるオリエンテーション（留学生センター所属学生）

相談室からの情報提供等は、掲示と共に電子メールも使用して行ってきた。事務・生活情報、修了後の手続き関係の情報、今後の協力願い、などを発信し電子メールの利便性を活用した。最近は多量の情報をメールで送受信しているようで、全体へ向けてのメッセージでは重要事項がうまく伝わらないことがある。対面して伝えられることについては機会をとらえて直接伝えるようにした。一方対面することができない修了生、同窓生などにはメールを活用して情報発信しネットワークを作っていくよう努めた。

全学的には、留学生ハンドブックの更新、留学生向け情報ホームページ改定が行われた。留学生センター相談室は、これまでの情報の更新や蓄積の結果を通じてこれらの改定に貢献することができ、また日常業務においてハンドブックやホームページに支えられている。

### 3. 学生個別教育：相談

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生に限らず、在学学生や他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談に対応した。結果として、多面的に名古屋大学および地域の国際化推進に貢献した。

#### (1) 相談時間

ワークショップを開催する週は、週7コマ、それ以外の週は8コマの相談時間を設定した。昼休みや4時限以降を相談時間にあて、その他の時間も可能な時に

は開室して相談に応じた。

## (2) 相談件数

相談があったときにはできるだけ記録を残すようにし、電子メールによる相談も1年間保存の後個人情報に配慮して処理するようにしている。ホームページの充実に伴って入学に関する問い合わせは全体的に減り、個人宛の留学受入れ打診メールや、田中が関わっているラテンアメリカ地域からの入学問い合わせに限定されるようになってきた。勉学・生活相談については気軽にどこからでも送信できるという利便性から、電子メールによる問い合わせ・相談が増加している。

詳しい件数の報告は省略するが、全体的な相談件数は、来訪による相談については減少、メールによる相談については増加の傾向が続いていると思われる。電子メールによる相談は、相談者にとっては同時に多くの人に送ることもでき簡便であるが、相談を受け付け返答するほうにとっては、どこまで丁寧に対応するかの判断が難しい場合がある。メールは後々まで書いたものとして残り、転送や誤送が起こりうるという性格上、メールによる相談対応はこれまで以上に説明責任が求められる。相談対応には、判断、配慮すべきことが多くなっており、ついコンピュータの前で考え込み時間を費やしてしまうということがある。

## (3) 相談内容

### ◆指導教員

教員との関係は研究・生活に重要な位置をしめる。進路に関わる問題について、問題の性質上指導教員に相談できずにいるがどのように研究を進めていくべきか、というような難しい問題も寄せられた。

### ◆勉学・研究

学習が思うように進まないというケースや、他大学の学生が日本語学習について相談室を訪れるケースなどがあった。学内外の制度や機関（チューター制度、愛知県の国際交流団体等他機関が開催するコース）など、様々な資源をつなげ活用できるよう心がけた。学会への投稿論文について、学会への参加費用についてなど、勉学・研究に関する問題は留学生たちにとって留学の成功に関わる重要事項である。学内外の研究資金の活用等について情報提供や提案を行なった。

### ◆入国、在留

在留期間や在留資格についての相談があった。修了

後、就職活動のための短期滞在が認められるようになり、これについての相談もあった。該当のホームページも充実してきているので、情報を確認しながら共に方策を検討することができた。

### ◆宿舎

民間アパート家賃の支払い、契約期間、退去時に必要となる費用等に関して、契約内容の理解が不十分だったり、口約束による不確かな取り決めや、常識についての期待の差が原因だったりするトラブルが複数あり、賃貸借人双方の主張を聞いて調停するなど、相談室が民間宿舎の賃貸の契約から解約に関わる時間が膨大なものとなった。できるだけ家主と賃借人が直接話し合い理解できるような体制を初めから整えておくことが望まれるが、言語の理由でそれができない場合には、手間を惜しまず書面を通して重要ポイントを互いに確認する作業が必要であろう。

### ◆経済

留学生センター所属学生に関しては、多くの方たちの協力により手続きが順調に進んだため奨学金が予定通りに支給され、経済的問題がなかった。他学部等学生のうち私費留学生からは奨学金についての相談がある。資料提供、ホームページ紹介等、適宜情報提供を行なっている。また、家族の問題、特に妊娠出産で経済的に困窮する学生がいる。子どもを生み育てる親としての準備や責任について理解を共有するようにし、そのうえで経済支援などの紹介を行なっている。

### ◆地域交流

様々な地域ボランティアが行っていたホームステイプログラムを、現在は留学生相談室がコーディネートして「地球家族プログラム」とし、年に数回のプログラムを行なっており、充実した地域交流が推進されている。また、地域の学校や生涯学習センターから寄せられる留学生との交流依頼についても留学生相談室が調整している。これらの活動に、留学生センター相談室も協力し、学内外で意義深い交流が推進されるよう努力している。

### ◆仕事・アルバイト

学業修了後、日本での就職を願う留学生は年々増加している。留学生向けのインターンシップ、就職説明会の実施が学内外で盛んに開催されるようになり、就職相談に来る学生に対しては、それらの情報を提供するとともに、就職支援室の紹介をして広く情報を得るようアドバイスしてきた。中部圏の大企業へ個人的に

インターンシップ申込みをしたいという相談もあり、研究をベースにしたインターンシップであれば指導教員と十分相談すること、企業へのコンタクトについて先輩留学生の実体験を聞いたり、AISEC（インターンシップ支援グループ）に連絡したりするようアドバイスした。

#### ◆電話・インターネット

宿舎の部屋でインターネットを使いたいというのがどのよう申し込んだらよいかという相談が新入生を中心に複数あった。料金設定等複雑で、日本語で書かれた情報を英語に訳して伝えるのも難しく、この相談対応に以前は頭を悩ませた。しかし最近は英語による情報提供を行なう会社も増えており、ホームページやチラシを紹介すれば、各自吟味して判断選択することが可能になった。

講師として参加した行事の詳細が本人の許可なくインターネット上に掲載されたことがあった。主催者や関係者は、個人情報インターネット上に流れる危険性を十分認識することが必要である。行事に参加する側も自己防衛が必要であろう。

#### ◆旅行・クラブ・趣味

ある団体が企画する旅行イベントへの参加を学生が直前になってキャンセルし、参加準備としてかかった経費を主催者へ支払うように求められるケースがあった。プログラム主催者にキャンセルに至った経緯を伝え、問題の原因はどこにあったのかを話し合い、双方の誤解を解くことに努めた。留学生には、募集要項や提出書類のコピーを取っておくことの重要性を伝え、プログラム主催者には、金銭に関わる事前説明や応募者の個人情報の管理の徹底を改めて依頼する機会となった。

クラブ・サークルについての相談は多い。これまでの学生たちの経験を紹介したり、練習場所や時間について調べて伝え関係者につないだりしている。

#### ◆事務手続き

市・県民税や国民年金について役所から書類を受け取ってその処理について相談に来る学生は多い。税金についても国民年金についても、住民としての権利であり義務であるという自覚を持ち、手続きを行なうようにしている。書類の内容についての説明や記入の援助などには知識や時間が必要である。関係機関と連携しながら進めつつ、大切な手続きを忘れないよう、適宜修了生も含めて情報発信を行なってきた。

インターネット上で申し込んで偽国際免許証を取得するという方法があるらしい。この免許証を持って日本で運転すると公文書偽造・無免許運転となる。全学的に注意を促した。

#### ◆医療・健康・安全

スポーツをしていて怪我をし、数週間の入院を要した学生がいた。医師との相談や国の家族との連絡体制づくりに相談室も協力した。他にも病気で入院した学生が複数おり、大学・病院との連絡体制、夜間・緊急連絡体制などを整えた。すべての学生たちが順調に快復して今年度は非常に幸運だった。異文化の中での生活で無理をして病気になったり、運動不足の時に急にスポーツをして怪我をしたりすることはよく見られ、入院となると本人はもとより周りの人々も遠くの家族もつらい。若さゆえに無理をしがちな学生たちに、機会ごとに注意していきたい。

安全面では、学内外で不審者が見られたり宿舎の郵便物が連続して紛失したりというできごとが報告され、これらのケースは逐次警察他関係者に報告相談しながら対策をとった。

#### ◆その他

留学生中心に多国籍の名大大学院生たちが企画運営する国際・学際学会 FeedFrth06の立ち上げ、広報、実施に関わり、補助金の申請、留学生センターでの広報用ウェブページ作成、資料の印刷、会場手配等について支援した。国際的な環境の大学ならではの、このような学生たちの活動が続けられるよう、全学の理解を得ながら、日本人学生たちの参加も奨励しつつ、今後も支援していきたい。

昨年ので年報で報告した「イスラム文化会」は文化活動を継続しており、研修会を開催したり、大学の授業に協力したり、または大学の文化サークル連盟への加盟をめざして関係者と話し合いを続けたりしている。「中部インドネシア留学生会」も研修会や地震後の報告会を開催することによって留学生同士の学び合いや他の学生・教職員たちへの発信を地道に行なっている。これらの活動が学内外で、より積極的な成果を生んでいけるよう、留学生センターも支援したい。

## 4. 学部・大学院教育：授業

留学生センター教員がチームで担当している基礎セミナー（学部一年生）向けの「多文化社会を生きる」は、

昨年に引き続き田中は時間の都合で休んだ。後期の教養科目「留学生と日本」は浮葉助教授を代表として松浦・堀江・高木・田中の教員チームで担当した。来年度からは新たな授業の開講を予定しており、準備を進めている。

大学院では、国際言語文化研究科での「異文化接触とコミュニケーション」の授業4年目を通年で担当した。研究科のプロジェクト助成金を得て、授業後有志で編集した冊子“Midland Intercultural Review”を完成させた。(授業については別途報告する。)

## 5. チューター調整

今年度から、留学生センター所属の学生たちがチューター支援を受けられることになった。一人約10時間の支援であるが、留学生にとっても、チューターにとってもよい学びと機会となった。今年度は相談室が調整役を担い、チューターに対するオリエンテーションや留学生に対する説明を行った。1年に40～60名の学生および同数のチューターに対して説明や書類のやりとりなどを行なうことになり、時間と手間がかかることが多いが、多くの学生にとって有益なこの制度を最大限に活用できるようにしたい。

ホスト（日本人学生）登録者数

	男性	女性	合計
文学部	2(2)	4(1)	6(3)
文学研究科	1	2(1)	3(1)
教育学部		1(1)	1(1)
法学部		4	4
法学研究科		1	1
経済学部	1	2	3
経済学研究科	1	1(1)	2(1)
情報文化学部	2(2)		2(2)
理学部	2		2
理学研究科	1	1	2
多元数理科学研究科	1(1)		1(1)
医学部保健学科		1	1
工学部	6		6
工学研究科		1	1
農学部		1	1
生命農学研究科	1	1	2
国際開発研究科	1(1)		1(1)
国際言語文化研究科	1		1
情報科学研究科	3(1)		3(1)
その他*		3(1)	3(1)
合計	23(7)	23(5)	46(12)

今年度は初めてで試行錯誤があったが、日頃の相談やアンケート結果を検討しながら今後の方策を決めていきたい。

## 6. 学生パートナーシッププログラム

学生パートナーシッププログラムは、国際交流に興味のある人たちを対象に、交流の「きっかけ」となる1対1のパートナー紹介や、様々な交流イベントの情報を提供するプログラムとして、引き続き教育交流部門が運営を行なった。本プログラムへの登録の際には交流目的、趣味、言語（外国語となる場合は、その運用能力レベル）などを聞き、できるだけ共通点の多い学生を紹介するよう試みた。また、マッチング対象となる適切な登録者がいなければ紹介が遅れること、学内外の交流プログラム案内をメール配信する旨を伝えた。今年度は他大学の学生や学外者の登録希望もあり、この場合には面談により信頼性などを判断し、活発な交流が期待できると思われる場合のみ受け付けた。登録は原則1年間とし、毎年度末にメールによって登録更新の希望を聞くことにしている。

今年度の登録者数及びマッチング数は下表の通りである。

留学生登録者数

	男性	女性	合計
NUPACE	1(1)	1	2(1)
6ヶ月コース	2(1)		2(1)
1年コース		1	1
教育学部		2	2
法学部		1(1)	1(1)
法学研究科	2(2)		2(2)
経済学部		1	1
経済学研究科		1(1)	1(1)
工学研究科	2		2
国際開発研究科	2(2)	1(1)	3(3)
国際言語文化研究科	1	8(2)	9(2)
情報科学研究科	2(1)		2(1)
環境学研究科		1	1
留学生センター(研究生)		1	1
研究者	1		1
他大学	1		1
合計	14(7)	18(5)	32(12)

( )は、2006年度にマッチングした数であり、前年度以前の登録者のマッチングも数えた。

\*他大学への転学者1名、一般人2名

## (1) 実施状況

### 1対1のマッチング

前年度同様、マッチングは、双方の交流のニーズ、言語レベル、年齢を考慮して行なうよう努めてきた。日本人学生からの登録は交流により外国語（特に英語）能力の向上を期待する学部1年生が多く、留学生は日本語が上級レベルで英語を母語としない者、日本語が初級レベルの博士課程の学生、研究者の登録が主であった。その結果、互いに使用できる（したい）言語能力レベルの違いが大きい、年齢的なギャップがあることが主な原因で、すべての登録者にパートナーを紹介するには至らなかった。

### 他プログラムへの参加案内

興味のある交流プログラムに参加することにより、登録者自らが交流の機会をつかむことを期待し、以下のプログラム情報をメール配信した。

- \* 留学生相談室が開催するコーヒー・アワー、ディスカッション・グループ
- \* 短期留学部門がコーディネートする新入留学生のためのヘルプデスク
- \* 英語で聞いて話す機会を提供する Language Shower プログラム
- \* 学生の企画するスポーツ・イベントやパーティー
- \* 大学院生による国際・学際学会 FeedForth06
- \* 留学生登録者には、ワークショップのお知らせ、国際開発研究科の学生が組織して運営する国際理解教育のデリバリー・EIUP プログラムのお知らせ

なお、今年度、情報発信により他プログラムに参加した学生の数は、述べ20名前後である（年間の発信件数は1登録者に対して平均10件）。

英語によるコミュニケーションを希望する登録者が多いため、英語による授業やディスカッションプログラムに参加する英語力に達していない学生も参加できるよう、Language Shower を実施した。このプログラムを企画する際、「プログラムに期待すること」、「参加可能な日時」に関して、登録者および留学生相談室主催のコーヒー・アワーやディスカッション・グループ参加者を対象に事前アンケートを行い、できるだけ多くの人に参加できるよう考慮した。しかしながら、参加を希望するアンケート回答者12名のうち、実際

に参加したのは2名で、その他の主な参加者は、凡そ中級レベル以上の英語力を持つ、主に次年度に交換留学を予定している学生、もしくは留学を目指す学生であった。このような言語・文化・コミュニケーションプログラムの提供に関して、登録者が何を期待しているのか、実施日時や時間帯、実施形式について、検討する必要がある。

### チューター

本プログラムの登録者のうち、大学院に在籍する学生には、留学生センター所属学生のサポートをしてもらうためのチューターを募集した。そのうち2名がチューターとなり、学生の指導を行なうとともに、友好関係を築き、チューター活動以外でも交流を深めていた。

## (2) 今後の計画

前年度から引き続き、登録者自らが選択し持続可能な交流へ発展させることができるよう、様々な交流プログラムの情報発信を試みた。これにより個々の登録者の交流に対する興味の度合いを測ることが可能となった。彼らの中には、パートナー紹介には至らなくとも、他のプログラムへの参加によって交流の目的を深化させ、自らの海外留学への希望を膨らませた者、活動を通して新しい自分を発見したと伝えてくれた者もいた。一方、紹介する上で必要となることを質問しても返信がない、様々な案内に無反応である、登録メールアドレスが不通になる、などのケースも多々あった。パートナー紹介に対して希望と合致しないために断るケースもある。これらを鑑み、登録者の可能性や興味の方向性を十分に知り、整理し、効果的な情報発信を考えねばならない。

パートナーシップ・プログラムは、「交流のきっかけ」を提供するものである。登録者の交流に対する熱意が冷めないうちに、多くの「きっかけ」を有する情報を提供することは可能であるが、登録者の授業、研究、部活、アルバイト、就職活動といった多忙な学生生活の中で、「きっかけ」を利用する時間もないまま、興味が薄れてしまうこともある。授業、クラブ、サークル活動等様々な場面で自然に「きっかけ」がつかめるよう、関係者とコーディネートしていく必要があるだろう。

また、登録者の関心を増幅させるために、学内での

交流イベント情報だけでなく、留学生センター海外留学室から発信されるセミナー、語学・文化研修といった案内も発信していきたいと思う。

1対1での交流についてパートナー紹介時に「交流が上手くいかない等、問題が生じた場合には気軽に相談して欲しい」と登録者に伝えているが、交流活動について報告の義務は課しておらず、交流についての情報収集も定期的には行っていない。交流を継続、発展させるか否かは当事者次第であるとはいえ、交流継続のために介入が適当であると思われる場合は、フォローしていきたい。今後は、紹介時点から3ヶ月、6ヶ月、1年後に、簡単なアンケートを実施しその回答から問題点を探るよう努めたい。

## 7. 地域連携：学外講演、文化交流

大学と地域の連携、大学の地域貢献の重要性は益々増大している。日本学生支援機構で一昨年度開始した「留学生地域交流」が最終年度となり、留学生センター松浦教授を企画委員長に、田中も企画委員として事業に参加してきた。複数の児童養護施設を留学生たちと共に訪問し、子どもたちとの交流を楽しんだ。同じような年代の子どもを持つ母親としても、彼らのおかれた家庭環境に非常に重いものを感じる。施設の中で大人たちに守られながら集団遊びをする子どもたちと一緒にいると、家庭にいる子どもたちはこんな経験ができるのだろうか、という疑問も湧いてくる。3年計画の事業に継続して関わり休日出勤もあったが、人間として教員として親として非常によい学びの機会となった。

学外で生涯学習センターを中心として進めてきた市民向けの講座を、今年度も継続した。

- 10月30日 愛知県国際交流協会 日本語ボランティアステップアップゼミナール「文化の多様性と接触」
- 1月20日 文化庁地域日本語教育支援事業 長久手町国際交流協会「学習者・ボランティアの異文化トレーニングの方法」
- 2月20日 守山生涯学習センター 人権講座「外国人とかかわる経験を通して街を見つめ直してみよう」

## 8. センター内委員会

相談室の業務の一環として、防災委員会の仕事に積極的に取り組んだ。災害伝言ダイヤル117は、毎月1日の練習日に伝言録音をし、学生たちにも呼びかけて現実に可能な方法かどうかを検討した。(結果として、この方法は数ある中のひとつとして機能すると思われる。)

またコンピュータ室の管理運営に関わり、毎日のスーパーバイザーの手配や調整を行なった。2006年12月から、スーパーバイザーは平日夜7時と9時にコンピュータ室の見回りをし、整理整頓や使用者への注意を行なうことになった。飲食の禁止、電源オフの徹底などについて使用者への呼びかけを行なってもらい、これまで通り夜10時までの開室が実現している。

## 9. 学内委員会

学内委員会においては、日常業務を活かし、また日常業務にも反映できるよう、可能な努力をした。

2006年4月、学内保育園「こすもす保育園」が数年の準備期間を経てついに開園した。田中はこの保育園の運営協議会委員となり、同時に男女共同参画推進委員会の下にある育児支援ワーキンググループとしても活動を続けた。国際貢献型という位置づけの当保育園のために、これまで留学生や外国人研究者たちとの相談活動の中で培った知識や経験を生かせるように努力した。

## 10. おわりに

今年度は、全学の留学生相談室と連携しながら、世界で活躍できる学生たちの教育を目標として、彼らの交流と成長をめざした様々な活動を展開した。関連機関と益々連携協力しながら、広く深い教育交流に取り組みたい。

今後も着実に、創造的で広がりのある仕事をしながら、教育交流に寄与したい。